

北海道！ 世界一楽しい冬がある



後藤 健市 (ごとう けんいち)

場所文化クリエイター（地域活性化伝道師）・場所文化機構代表

1959年帯広市生まれ。米国に留学中に、ベンチャー企業（東京）にチーフディレクターとして参加し、国内家電メーカーのワープロやパソコンのセールスプロモーションを担当。86年に地元・帯広に戻り、社会福祉事業に携わりながら、同時に地域づくりに取り組み、北の屋台、スノーフィールドカフェ、場所文化フォーラムなどの立上げや運営、食をテーマに地域活性化に取り組む会社設立等に関わる。現在も、全国各地を飛び回り、地域づくりの講演、企画・提案、実践を行っている。

もったいないお化け

食べ物を残したり、おもちゃなどを粗末に扱うと“もったいないお化け”が出てくると親に言われた。

その“もったいないお化け”が、公共広告機構（AC）のテレビCMとして流れていたのは30年ほど前。里の親子が山のお寺に招かれ夕食をご馳走になるが、好き嫌いを言って苦手なおかずを残す。その夜、食べ残されたニンジンや大根、キュウリやナスなどが紋付袴姿で現れ、「もったいない、もったいない」と叫び、彼らを取り囲む。翌朝、お坊さんから「それは、もったいないお化けだ」と聞かされ、反省した親子は好き嫌いせず苦手な物も残さず食べて、めでたしめでたし。

食料自給率と廃棄率

食べ残しがもったいないのは今も同じだが、当時とは事情が異なり、好きなものまで余して残している。日本の食料自給率（カロリーベース）は40%程度だが、廃棄食料がなんと25%もあるという。金額で言うと、残飯による食生活損失は11兆円にもものぼり、日本の農水産業の総生産額とほぼ同じぐらいあるらしい。アメリカとフランスの自給率は120%を超え、ドイツ80%以上、英国70%以上という数字を見ると、日本の自給率の低さがやはり目立つ。食料自給率だけ見ても、農業の本質、地域における農業の価値を正しく把握できないと思うのだが、大量の食料廃棄はやはり“もったいない”の一言に尽きる。

もったいないが世界と地域を救う

実は、この“もったいない”はケニアのワンガリ・マータイ女史の活動によって今や世界語“MOTTAINAI”になっている。マータイ女史は、ノーベル平和賞を受賞した翌年（2005年）に来日し、リデュース（ゴミ減量）、リユース（再使用）、リサイクル（再利用）の環境の「3R」運動を一言で表す“もったいない”という日本語に出会い感銘を受け、世界共通語にしよう！と呼びかけ、“MOTTAINAI”運動が始まった。

確かに“もったいない”は環境には欠かせない言葉だが、全国各地を訪ねて感じているのは食料だけではなく、まちづくりにとっても大変重要な言葉であると

いうこと。その一つが季節ごとの景観。今だと、寒さ厳しい冬であり、迷惑な存在とも言える雪。各地の雪まつりなどのイベントは、この“もったいない”資源を活かしたものだが、降り注いだ雪と景観をそのまま楽しむ仕掛けも必要だと思う。スキーやスノーボード、スノーバイクやソリなどはすでにあるが、山だけではなく、広大な畑の雪を楽しむアイデアが欲しい。

スノーフィールドカフェ

そんな思いを込めて取り組んだのがスノーフィールドカフェ。とち帯広空港から8km、帯広の街中からは20kmの雪の畑の中のビニールハウスのレストラン。

十勝は太平洋側にあるので、北国の冬のイメージである“どんよりした曇り空”とは全く異なり、好天が続く。カフェの窓からは、澄み切った青空、雪に覆われた平野、整然と立ち並ぶ防風林、そして日高山脈という雄大な景観が楽しめる。さらに、夕日が沈むとビニールハウス全体の色が刻一刻と変化し、自然と一体となった時間の流れが感じられる。レストランだから飲食もするが、一番の売りは景観とそこに流れる時間。美味しい料理なら、札幌や東京にお薦めの店があるが、雄大な真冬の景観を飲食とともにゆったり堪能できる場合は、この時、この場にしかない。これは、日本が得意とする借景を活かした取り組みであり、地域にあたり前のようにある“もったいない”を活かした場である。(ちなみに、今年はお休みですが…)

スノーサイクリング&ピクニック

冬の景観を楽しんでいるだけでは、広大な雪原がまだまだ“もったいない”。そこで考えたのが、スノーサイクリング&ピクニック。お弁当と飲み物をバックパックに詰め、真冬の暖かな日差しを受けながらのサイクリング、そして広大な雪原の中での真冬のピクニック。人が足を踏み入れている雪原には、ウサギやキツネ、鹿や鳥の足跡があり、ついその跡を追ってみたいくなる。特別な場や仕掛けを人工的(お金をかけて)に作るのではなく、冬期間、全く使われていない畑を楽しむという“もったいない”を活かしたアイデア。

この真冬のサイクリングは普通の自転車では無理なので、雪上自転車、通称スノーチャリ(スノーチャリンコの略)が必要になる。スノーシューやスノーモービルでの移動も楽しいが、スノーシューで長い距離を歩くには相当の体力がいるし、スノーモービルはガソリンを使うし、エンジン音もそれなりにうるさい。

冬はトラクターなどの農業機械も動いておらず、かつ他のさまざまな音も雪に吸われるので騒音が消える。その「静けさ」も含め、好天の冬のひとときを全身で楽しむにはスノーチャリが最適。人力だから環境にも優しく、冬の運動不足解消にもなる。それに、スノーピクニックを楽しむ場は、畑以外にも、広い河川敷や公園などいくらでもあるはず。

スノーチャリの基本機能は自転車と同じだが、雪上を走るのだから車体は強度がありながらも軽量であることが重要。タイヤの代わりに、プラスチック製の幅広のキャタピラがいいのでは。と、素人考えのプランはあるのだが、残念ながら、私にはこれを作る技術がなくまだ実現していない。(誰か、スノーチャリを試作してくれる人を紹介してください。)

世界一楽しい冬がある北海道

地域のあたり前は、その場所、その季節だからこそ特別なものであり、そういった“もったいない”を活かし磨きをかけることから新たな価値が生まれる。

北海道は夏から秋は、農業も観光も盛んだが、冬は冬眠、と言うか仮死状態。しかし、長い冬、厳しい寒さ、さらには大量の雪を活かし、冬も稼げるようになれば、北海道経済のV字回復は決して夢ではない。

冬の遊びのアイデアはいくらでもあるだろう。そういった遊びが得意な人と、その仕掛けや道具を作る技術者を組み合わせ、官民一体となり、「雪遊び・冬遊び」を楽しみながら「世界一楽しい冬がある北海道」を目指してみようではないか。農閑期であり、建設工事も激減する冬の北海道は、優秀な遊休人材の宝庫とも言える。寒さと雪の中で育った道産子が本気になれば、この夢は必ず実現できる。



スノーフィールドカフェ

